

モンスターハンター： クロスサバイブ

Wandarel

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モンスターハンター。

それは生と死の境目を行くサバイバル生活をする者。

あるものは英雄となり、あるものは死んでいく。

自然の摂理に抗うことなく、生命は回っていく。

これは、極一部の英雄の詩なり。

目次

プロローグ「契約の印」	1
第一編「小さき生命」	17

プロローグ 「契約の印」

狩り

それは命懸けの生存競争。

生きるか死ぬか、それも分からない。

だが、そんな事を気にもしない二人の少年達がいた。

家の二階から飛び降りて、元気に走り回る少年たち。

??? 「兄貴、ようやく俺たちも戦いに行けるな！」

??? 「落ち着けダンテ。気持ちはわかるがはしやぎすぎだ。」

ダンテ 「なこと言ったって兄貴だって今日を楽しみにしてたるバージル！」

バージル 「ふん、お前ほど騒がしくはしてないさ。」

ダンテ・スパーダ。銀髪の少年でちよつと短絡的なお調子者な性格。

優しさも人一倍あり、兄や姉からは愚かなバカと言われている。

運が極端に良い。

バージル・スパーダ。ダンテの兄であり、冷静で物事をはっきりと区別をつける性格。

現実的な部分多く、弟や姉から頭の固い効率厨と呼ばれてる。

運が極端に悪い。

この二人はこののどかな村のジャンボ村で育った。

姉であるメアリは四年ほど前にハンターとなって一人前となり、ドンドルマのギルドに入ったらしい。

だが、走り回っていたダンテとバージルの首根っこを掴んで二人の頭をぶつけさせた男がいた。

??? 「騒ぐのはそこまでクソガキ共。」

ダンテ「お、親父……………」

バージル「いつからそこにいた……………」

二人が悶絶しながらも父親と呼んだ男は

デイビッド・スパード。ジャンボ村の教官を務めており、長女メアリ、長男バージル、次男ダンテにCQCなど、狩りやサバイバルに必要な事を一から全てを叩き込んだスパルタ教官。

ボウガン関連の心得は全て会得しており、その腕は未知数。

なお、教官のくせに時々抜けてたりお茶目な部分もあるため息子、娘の三人からなめられてる。

デイビッドを踏み入れるんだぞ。遊びじゃないんだ。」

ダンテ「わくってるっての。」

バージル「同じくだ。少なくともダンテと一緒にしないでくれ。」

ダンテ「なんだと！」

デイビッド「そう言ってる昨日からソワソワしてて山に行つて炭鋤で大声で叫んでたの俺は知ってるからな。」

バージル「……ちっ。」

ダンテ「なんだよ兄貴もやつぱり楽しみにしてたじゃんか！」

そんな事を言いながら、ジャンボ村の広場に集まる。

村長は新天地の開拓とやらに行つており今は村にはいないが、その代理として竜人族のお姉さんこと、リユーナがハンターを中心とした村の発展をしている。

リユーナ「ようやくこの日が来たわね、ダンテ、バージル。」

ダンテ「おつす、リユーナの姉御！」

バージル「お久しぶりです、リユーナさん。」

リユーナ「ふふ、二人共まだ完全に村を出るわけじゃないんでしょ？」

バージル「ええ、俺たちはまだ未熟。しばらくは近隣の密林でのサバイバル生活からでしょうね。」

ダンテ「まあ、親父との国際条約があるからなあ。ほんとは今すぐにも世界に羽

ばたきたいんだけどなあ。」

バージル「ふっ、経験無く表に出ても犬死するだけだ。だからお前は愚かなバカと言われるんだ。」

ダンテ「やってみなきやわかんねえだろ。挑戦もなしにちまちまとしてるなんてつまらねえぜ。だから兄貴は頭の固い効率厨って言われんだよ。」

バージル「……………」

ダンテ「……………」

バージル「……………表に出ろダンテ。たまにはお前の遊びに付き合つてやろう。」

ダンテ「そうこなくつちやな、バージル兄ちゃんよ！」

二人が拳を構えた時に、二人に回し蹴りが入る。

デイビット「兄弟揃つて馬鹿な事するな。つたく、メアリの時は苦労しなかつたんだがな……………」

二人にたんこぶが出来るほどの破壊力をしている教官の蹴りは凄まじいものだった。

???「ガハハハ！派手にやられたな坊主共！」

船大工の親方のゲンヤ。このジャンボ村で船の造船などを携わっている人だ。

ダンテ「つたく、親父には手加減つてのを知つて欲しいね。」

ゲンヤ「バージル坊、腕相撲やつてみるか！」

バージル「あいにく今日は新米ハンターとしての準備周りだゲンヤさん。今度こそ勝ちますよアンタに。」

ゲンヤ「ガーツハツハツハツ！ワシはまだまだお前さんらにや負けんぞ！」
次に二人は工房へと赴いた。

ダンテ「おつす！ヘクばあ！」

バージル「お久しぶりです、ヘクさん。」

ヘク「ほつ！よく来たね！アンタ達もようやくハンターの門出かい！」

デイビッド「こいつらはまだまだひよっこだ。」

ヘク「お前やナオミもあの時はひよっこだったろうに。」

ヘクさんが笑いながらそう言うと、デイビッドはバツが悪そうに唸った。

ヘク「そんなじゃ、明日にはマイハウスに最低限の武器は入れておくから決めておきな

さいな、二人共！」

ダンテ「OK！」

バージル「了解した。」

そして、三人はある程度の挨拶回りを終えて夕方にマイハウスへと戻った。

ナオミ「あら、おかえり三人共。」

件の母、ナオミ・スパード。片手剣の使い手で、ジャンボ村のハンターの一人。容姿

はかなり若く見える。調合のプロでジャンボ村の調合屋のあるじであるロルドの元で修行して会得した「錬金術」の使い手だ。

ダンテ「ただいまー、おふくろー。」

バージル「親父がボクソクに言われてたな。」

デイビッド「なんだとお、俺はこう見えても立派なソルジャーだったんだぞ？」

ナオミ「はいはい、その話は何回も聞きましたから。」

ダンテ「そういや、親父とおふくろはなんでジャンボ村から出ないんだ？」

デイビッド「そりゃ、ベテランのハンターがここを離れたらいかんだろう？」

ナオミ「それもあるけど、本当はジャンボ村にお世話になったからその恩返しをした

いでしょ？」

デイビッド「む……。」

バージル「ふっ、需要のないツンデレか。」

デイビッド「なんだとおバージル！」

ナオミ「はいはい、そんな事いいからさっさと食べましょう。今日はオツタマケーキ

よー！」

ダンテ「うっひよお、オツタマケーキなんて久しぶりだぜ！」

バージル「ドッキリゾットガチャはもう勘弁して欲しいがな。」

わいわいと食事をしていた時だった。

ダンテ「そういや、武器はヘクばあがくれるって言うってたけどこの家に送られるのか？」

デイビッド「いや、お前達にはこことは別の家に住んでもらう。」

ダンテ&バージル「は？」

ナオミ「ほんとは私もあんまりだと思っただけで、二人には明日から別の家に住んでもらうわ！」

バージル「……………待て、ということとはもしかして。」

ダンテ「飯を食い終わったら……………」

ダンテとバージルは実家のすぐ近くの空き家に住むことになった。

バージル「薄情者め……………」

ダンテ「まあそう言うなよバージル。」

二人にはちよつとした約束があつた。

例えば家族でも名前前で呼び会おうというルールがあつたからこそ、だいたいお互いが名前前で呼んでいる。

ダンテ「いいじゃねえか！新しいスタートらしくてよ！」

バージル「もう少し楽をしていたかったんだがな。」

ダンテ「まあ、何はともあれ起きたことは仕方ねえよ。寝ようぜバージル！」

バージル「ふっ、そうだなダンテ。」

二人はその日はゆっくと熟睡した。

翌日、だらだらと身体を起こして目を覚ました。

顔を洗い、歯を磨き、最低限の朝ごはんを食べていた。

ダンテ「……おふくろ、すごい頑張ってたんだな。」

バージル「母は強しとよく言うだろう。」

そうこうしていると、玄関から一匹のアイルーが来た。

ダンテ「ん？迷子か？」

ルームサービス「初めまして、ダンテさん、バージルさん。ボクはこの家のルームサービスを任されたアイルーだニヤ。」

バージル「ルームサービス？」

ルームサービス「食料になる物を持ってきてくれたらボク達が料理をして振る舞うニヤ。」

ダンテ「おお、そいつぁいいじゃん。」

バージル「つまるどころ、それ以外だと何かやることがあるのか？」

ルームサービス「もちろんだニヤ。お二人の記録とかを記入したりとかもするニヤ。お風呂の準備も忘れてなければちゃんとしておくニヤ。」

バージル（忘れる時もあるのか……。）

ダンテ「ほえー、超優秀じゃねえか！」

バージル「待て、この手の奴は報酬金を莫大に要求してくることが多い。」

ルームサービス「そこら辺はご心配なくだニヤ。ボクは昔ナオミさんとデイビッドさんに助けられたから、メアリさんやダンテさん、バージルさんの助けになりたくて無償でやってるニヤ。気にすることないニヤ。」

ダンテ「だつてよバージル。」

バージル「……一応信用しておこう。」

そして、武器を見てみたが。

ダンテ「うーん、俺はこいつにしようかな。」

バージル「ならば俺はこれだ。」

ダンテは太刀を、バージルは操虫棍を選んだ。

バージルは左手にくつついたクルドローンを少し撫でた。

バージル「クルドローン、いずれはこいつも最強に仕上げてやる。」

ダンテ「俺もコイツでやってみるぜ！」

ルームサービス「お二人ともよく似合ってるニヤ！」

二人が武器を携えダンテはレザー装備セットを、バージルがハンター装備セットを着込み、表通りに出た。

そして、密林へと向かおうとした時、ネコバアが来ていた。

最近ジャンボ村でも見かけるようになった人だ。

見た目は行商で来ている行商ばあちゃんに似ているが、ネコバアはオトモアイルーの斡旋などをしている。

ダンテ「ネコバアー！」

ネコバアや行商ばあちゃんとはもはや顔なじみである。

ネコバア「おう、元氣かいのー。ダンテ坊やにバージル坊やー。」

バージル「今日もオトモアイルーの斡旋か？」

ネコバア「そんなとこじやのー。……おお、そいえば坊やらもハンターになるんやつたんかのー。」

ダンテ「そうだけ！てなわけでアイルーいたら雇いたいぜ！」

ネコバア「おーん………ちようどよくあと二匹程はおるけどもなあ……。」

バージル「……？」

疑問に思った次の瞬間、バージルの喉元に食らいつこうと飛びついて来たメラルー。

バージルは見事それを回避した。
だがすぐにメラルーがバージルに飛びかかる！

??? 「シヤアアアッ!!」

ダンテ「バージル!!」

だが、バージルは避けなかった。

バージルの首から血が出る。

??? 「フーツ!!」

バージルが威嚇するメラルーを抱きしめた。

バージル「よくこんな姿になってまでそのアイルーを守り続けた。怯える必要はもうあるまい。」

状況が慌ただしくて見えてなかったが、そのメラルーは目に傷があり、左耳が半分欠損しており、身体も傷だらけのメスだった。

??? 「……………妹に手を出すニヤ……………!!」

まだ強く敵意が残っていたが、バージルはそれを気にしなかった。

すると、メラルーが飛び出してきた所からアイルーがひよこひよこ出てきた。

??? 「姉さん……………この人たちは信用出来るニヤ。」

アイルーがそういった時にメラルーがさらに吠える。

??? 「そういう風に思つて裏切られた……貴方の為なんだニヤ。」

ダンテ「おいおい、ネコバアコイツらつて！」

ネコバア「おーう、坊やらの思つてる通り意地の悪い奴らから助けたネコだねえ。」

バージル「……その目、その表情……面白いなお前。」

??? 「……………」

メラルーは警戒心を解いた。

アイルーの方がとととととダンテに近づいていく。

ダンテ「おおー、よしよし。こんなとこまでよく頑張つたなお前ら。」

??? 「あ、ありがとニヤ。」

ネコバア「で、どうするべよ。この子ら？」

バージルとダンテはニヤリと笑つて

バージル&ダンテ「雇う。」

と言つた。

ネコバア「ほなら、名前をつけてやつてあげえ。」

ダンテ「そうだなあ……じゃあ、お前は今日から「ジャスマン」でどうだ！」

ジャスマン「おお!!いい名前だニヤ!是非ともよろしくお願いするニヤ、旦那さん！」

バージル「……妹の方は問題なさそうだな。お前は どうする?」
???「……好きな名前でどうぞニヤ。」

バージル「ならばお前の名は「ヤツザキ」だ。文句はあるまい。」

ヤツザキ「……ええ、もちろんだニヤ。」

ジャスミン「ニヤニヤ! ヤツザキ姉さん、そんなこと言つて本当はバージルさんに一
目惚れだったニヤ!」

ヤツザキ「そんなことありえないニヤ。」

ダンテ「だつてよバージル。」

バージル「ふん、真実かどうかは問わん。お前たちが強ければいい話だ。」

高圧的なように見えるバージルだが、本当は優しい事を知っているダンテはあえてそ
れを指摘しなかった。

バージル「さつそくだが、お前たちには今からクエストに同行してもらおうが構わない
か?」

ヤツザキ「問題ないニヤ、ご主人。」

ジャスミン「問題ないニヤ!」

二匹はものすごく張りきっていた。

ダンテ「そんじゃクエスト見に行くか!」

そして、酒場に向かった。

ダンテ「よう、パティ！」

パティ「こんにちは、ダンテさん、バージルさん。……あら、オトモアイルーさん！」

ヤツザキ「こんにちは……ニヤ。」

ジャスミン「こんにちはですニヤ！」

バージル「新米ハンターにふさわしいクエストはあるか？」

パティ「そうですね……これとかどうでしょう？」

時期は繁殖期。

出されたクエストは「草食竜の卵の納品」と「肉食竜の卵の納品」だった。

ダンテ「同時にこなしとくか。」

バージル「どうせこれくらいしかないだろうしな。」

パティ「まあ、一人前になったらもっとクエスト増えるかと思えますよ。」

ダンテ「それなら頑張るしかねえなバージル、ジャスミン、ヤツザキ！」

バージル「ふん、分かりきったことだなダンテ。」

ジャスミン「初のお仕事頑張るニヤ！」

ヤツザキ「……ニヤ。」

そして、密林へと二人で足を踏み込んだ。ここは父親のデイビッドと武者修行の一環

で回ったことがある。故に色んなところの裏道や獣道なども知っている。

地図にはない場所もよく知ってるのも彼らの狩猟センスの高さが為すものだろう。

ダンテ、バージル達はベースキャンプからの裏道を使い、一気にエリア7へと着いた。バージル「俺とヤツザキでエリア8の草食竜の卵を運ぶ。そしてエリア7の肉食竜の卵を運ぶ。これでどうだ？」

ダンテ「OK、任せな！いくぜジャスミン！」

ジャスミン「ハイですニヤ！」

バージル「ヤツザキ、行くぞ。」

ヤツザキ「御意ニヤ。」

二人は運良く、クエスト前情報で聞いていたクルルヤツクの出現に警戒はしていたが、特に出くわすことはなかった。

ちなみに、本来納品はそれぞれ一個で十分だが、あえて二個取ったのは食料にする為であった。

そして、裏道を使って安全にベースキャンプへと帰還したものの、少々疲労で疲れた為、少し休むことにした。

その間に、ヤツザキとジャスミンが納品を終えており、あとは村に帰るのみだったのだらけていた。

ダンテ「ふう……しかしこれで卵ゲットだなバージル。」

バージル「多少はいいものが食えるだろう。」

そう思っていたが、ダンテはバージルが持つてゐる卵が少し色が違うことに気づいた。

ダンテ「なあ、バージル。それホントに草食竜の卵か？」

バージル「そのはずだが？」

ダンテ「なーんか紫っぽいとかなあ。」

バージル「まあ大丈夫だろう。さあ、帰るぞヤツザキ。ダンテ。」

ダンテ「うーい。」

そう言つて二人が同時に立ち上がった時だった。

ピキピキッ！

二人の持つ卵にヒビが入つたのだ。

ダンテ&バージル「……ん？」

徐々に動きながらヒビが大きくなっていつてモンスターが生まれた。

ダンテの方は鳥竜種のランポスの幼体が。

バージルの方は飛竜種のイヤンガルガの幼体が生まれた。

ダンテ&バージル「……え？」

そう、二人はアイルー、メラルーだけでなくモンスターも育てることになったのだ。

第一獵「小さき生命」

二人は密林から二匹を上手く隠しながらジャンボ村に連れて帰り、デイビットとナオミの元に連れてきた。

だが、反応は予想外のものであった。

デイビット「…………お前たちもか。」

ナオミ「ええ、懐かしいわねえ。」

ダンテ「え、どういう事だ？」

ナオミ「メアリもモンスターを手懐けて来たことがあったのよ。」

バージル「なんだと？」

デイビット「メアリが手懐けたのはライゼクスだ。」

流石の二人も衝撃を隠せなかった。

あのライゼクスの幼体とはいえ手懐けたのはすごいことである。

デイビット「それで、育てるのかお前達も。」

バージル「興味深いからな。」

ダンテ「俺もたまにはバージルの気まぐれに付き合つてやろうかな。」

デイビッド「そうか……。」

ナオミ「いい、ダンテ、バージル。小さい命でこの二匹は貴方達の事を親だと思ってるわ。大きくなるまで片時も離れず大切に、まごころをこめて育てるのよ？」

ダンテ「うーい。」

バージル「分かった。」

デイビッド「で、名前は決まってるのか？」

ダンテ「俺はこいつを「エボニー」って名前にするぜ。」

バージル「……黒狼鳥からとって『ベオウルフ』にしようと思う。」

デイビッド「ほう……いいセンスだ。」

ナオミ「困ったらいつでも頼りなさいよー！」

そう言つて各自で育成を始めた……が。

鳴けば食事などの合図のため、ろくに眠れない。

ダンテ「あー！エボニー、テメエ!!」

エボニー「ヒャオツ！ヒャオツ！」

糞は色んなところで発生。

バージル「……。」

荒れに荒れたボックス。

ベオウルフ「キュウウウツ!!」

ヤツザキ「……こいつらバラしていいかニヤ、ご主人。」

バージル「落ち着けヤツザキ。」

すると、ベオウルフが飛び、バージルの頭に着地し、フンをしてから元の位置に戻った。

ベオウルフの顔は実に嬉しそうだった。

バージル「……ヤツザキ、奴をバラしてもいいだろうか。」

ヤツザキ「落ち着いてくださいご主人。」

エサやりの時も苦戦した。

バージル「成体の時はクンチュウを丸呑みしているとは聞いた事はあるが……。」
思いっきり肉も野菜も食ってる。

だが意外なのは……。

ダンテ「エゴニーも野菜食ってるぜ……。」

肉食竜鳥竜種のランポスが肉以外のものを食べていた。

ダンテ「割と雑食なのか？」

バージル「かもしれんな。」

二人は一生懸命に特産キノコの納品の採取クエストをこなしてハンターランクを少

しずつ上げながら二人は着々と強くなつていった……。

バージル「ダンテ、異国では翔蟲という狩獵技法があるらしい。」

ダンテ「ほほお？どこ発祥なんだそれ？」

バージル「母さんの故郷のカムラの里かららしい。」

ダンテ「どれどれ……あーなるほどな、どうりで俺達がどんだけ高い所に隠れても母さんは必ず俺たちを見つけてたわけだ。」

バージル「俺達に専用の翔蟲をくれるらしいな。」

バージルは藍色の翔蟲を、ダンテは真紅の翔蟲を手に入れた。

ジャスミン「ニヤニヤ、翔蟲の技術があれば手綱代わりにもなるつて書いてあるニヤ。」

ダンテ「すげえなあ。」

ヤツザキ「これであのクソ鳥を……。」

バージル「ヤツザキ、ベオウルフも大事な家族だ。それは忘れるなよ。」

ヤツザキ「……チツ。」

バージル（こいつ今舌打ちしたな。）

二ヶ月後

ベオウルフ「キユウウツ!!」

ベオウルフが火球ブレスを使えるようになり元々イタズラ好きだったベオウルフは至る所にブレスを吐く。

その結果、ダンテとバージルの住んでいるマイハウスが火事になった。

ダンテ「あつちいいっ!!」

ジャスミン「し、しっぽが燃えてるニヤアアアツ!!」

ダンテとジャスミンに燃え移り、

エボニー「ヒユウー……ヒヤオウ……。」

エボニーは火を見て怯えている。

だがそんな混沌としたやりとりも終わりを迎えた。

ヤツザキ「ニヤ。」ドスツ

ヤツザキが冷静に、かつ正確に麻醉投げナイフを突き立て、ぐつすと眠り大人しくなった。

ヤツザキ「このクソ鳥が……ご主人に迷惑かけてるんじゃないニヤ。次は殺してやるニヤ。」

ダンテ&ジャスミン「おおおー。」パチパチ

エボニー「ウオウウオウウオーウツ!!」

二人は拍手し、エボニーも賞賛するように雄叫びをあげる。

バージル「よくやった、ヤツザキ。」

バージルが頭を撫でると、ヤツザキはしっぽをピンと立ててゴロゴロと喉を鳴らした。

ジャスミン「お姉ちゃん照れてるニヤ。」

ダンテ「だいぶん分かりやすいなあの子。」

モンスター。またの名をオトモンと呼ばれる二匹も大きくなってきた。

そして、実力もかなりつけてきている。

ダンテ「……一回は野生に返したんだがなあ。」

強いかどうかで言えばこの二匹はかなり強かった。

一応は野生に返したのだが、気がついたらマイハウスまで戻ってきているのだ。

狩ってきた獲物を分け与えるがごとく口に沢山啜えて帰っている。

バージル「……小さめのアプトノスとクンチュウか。それにカンタロスまで……。」

エボニー「ヒャオツ! ヒャオツ!!」

エボニーは食べてくれると言わんばかりに嬉しそうにしている。

ダンテ「……これ食べなきゃいけないか?」

バージル「む、無下にはできまい。」

バージルがベオウルフに視線を向けるとベオウルフも食べてくれると期待の目をしてる。

バージル「……調理をしてもらうか。」

ヤツザキ「お任せ下さいニヤ。」

ジャスミン「キッチンアイルーの腕前を見せてあげるニヤー！」
元々キッチンアイルーとしての適性も高かった二匹が仕上げた。

ダンテ・バージル「い、いただきます。」

まずはカンタロスの唐揚げなるものを食べてみた。

ダンテ「う、うめえ!!」

バージル「これは……。」

思わず箸が進む。

そして、クンチュウは殻を割いてエビみたいになっていたが、これもまた美味しい。

バージル「凄いぞ、これは!!」

ベオウルフとエボニーも食べていたがとても満足そうに食べていた。

ダンテ「やるなあ! ジャスミン、ヤツザキ!!」

ヤツザキ「メルシーだニヤ。」

ジャスミン「ふっふーん、いっぱい練習した甲斐があつたニヤ！」
そうして色んな日々を過ごしていた。

時には喧嘩をし時には家出をすることもあつたが、お互いの絆は深くなつていった。

ダンテ「さてと、バージル。俺達もようやく大型モンスターの特許可が出たな。」
バージル「最初はモンスターとの共生などアイルーメラルーくらいしかできないもの
だと思つていたが、案外それでも無いな。」

二人と二匹は翔蟲などなくとも、意志を汲み取れるほどに成長した。

ダンテ「そんじゃ、大型初心者の関門イヤンクックを狩りに行くか！」

バージル「足をすくわれるなよダンテ。」

その2人の掛け声に四匹もそれぞれに呼応した。

ジャンボ村の二人と四匹の英雄の初陣である。